手法

〔安齋隨筆後編七〕一イシナドリ　貞丈云、いしなどりは、今世童女などのもてあそびの、いしなごとるといふ事也、古しへより有し事也、

〔嬉遊笑覽六下兒戯〕いしなどり、○中略今いふ手玉なるべし、埃囊抄に、石拵子をいしなごと訓り、拵は字書に摸也とありて、義はかなへるやうなれども、其字面何に出たるか、疑ふらくは抓字の誤にや、

〔埃囊抄一〕小兒ノ翫物ノ中ニ、サヽラコキリコナド其字如何、○中略石拵子、○下略

〔倭訓栞前編三伊〕いしなご　石投の義なりといへり、物にいしなとりとも見えたり、倭名抄に擲石と見ゆ、○中略法隆寺の寶物に、いしなとりの玉あり、小兒の語に、小石をいしなといふ、伊勢に石名原あり、奥州に石名坂あり、

〔物類稱呼五言語〕石投、江戸にて手玉といふ、東國にて石なんご又なつこともいふ、信州輕井澤邊にてはんねいばなと云、出羽にてだまと云、越前にてなゝつごと云、伊勢にてをのせと云、中國及薩摩にて石なごといふ、

〔和漢三才圖會十七嬉戯〕擲石　和名以之奈介、俗云石奈古、介與古通、○中略

按、擲石兒女取碁石十有餘、撒之擲一於空、未墜中與所撒石二三箇同攫合之、其餘如之、拾盡爲勝、

〔守貞漫稿二十八〕石子

イシナゴト云、今京坂ニテハ、イシナゴトリト云、女童集リ各々小石或二或ハ三ツヲ集メ、一童持之、席上ニ拋蒔キ、其數石ノ内一石ヲ取リ、是ヲ尺バカリ、或ハ二三尺上ニナゲ上ゲ、落來ル間ニ二石ヲトリテ、後落ル石ヲ受ケ、席上ノ石トリ盡セバ、再蒔キ散之、今度ハ三石ヅヽヲ取テ、落ル石ヲ受、三四回准之、七回ニ至リ畢トス、半ニ受過ツ時ハ、次ノ童ニ讓ル、又蘿子ヲ以テ石ニ代テ爲之ヲムクロジトリト云、又ゼヾ貝ヽ云小螺ニテモ爲之、ゼヾガイ、江戸ニテキシヤゴト云、

〔夫木和歌抄三十二玉〕家集　西行上人